

## ■■■ 地狂言全盛地 ■■■

### < I >

大正一五年の秋、三河の奥の北設楽の山地を歩いていた折、思いがけなく山村の祭りに遇って、ほとんど二十幾年ぶりで地狂言を見た。言うまでもないが、地狂言とは、地の人たちの演る狂言で、村芝居の謂である。

山また山の奥には、こうした平地の二昔も前が、まだそのままに遺っているのも懐かしかった。宵宮の祭りをすまして、村の人たちと枯枝を燃しながら、拝殿の向正面に立った舞台を見ていたものである。舞台脇の棧敷には金何円也等と記した纏頭の札が灯りに照らし出されて、青年会の山形模様の提灯がならんだところも昔のままである。見物席の土間には、藁を敷き散らして、二重回しの男や振分に結った娘たちが、早くから来て座りこんでいるのも、いかにも村の祭りらしい気持ちである。しかしながら幕が開いて、手習鑑の源蔵女房の出を見たときは、少なからず幻滅を感じたものである。源蔵が出て松王が出て、何だか少し寒さが身に伝えてきた。今まで胸一ぱいになっていた華やかな地狂言の幻影が、ありていに言うといひっくり返されたのである。暗い山道を一人で還って来て、宿につくと匆々に寝てしまった。

それでも翌朝給仕にでた宿の娘から、狂言の評判を聞いたときは愉快であった。跡方もなく毀され尽くした幻影の綾が、どうやら再び立ち直る余裕が出て来たのである。かなり寒い晩だったが、狂言の果てたのは朝の四時半であったそうなのだから、四幕の舞台に、前晩の六時頃から始めて幕間が二時間半ずつもあったと言うのだから、狂言場の光景は大方想像される。それにしてもあの冷たい藁の上に座って、一夜を明かした見物衆の辛抱強さにまず驚かされる。しかしまた一面から考えると、その辛抱強さがやがて地狂言を守り立てて、永いこと保ってきた大きな要素であったのだ。何も昨日今日に始まった問題ではない、由来は長い長い伝統の幕を引いていたのである。その蔓の端に掴まって、果たしてどこまで辿って行かれるか、ずいぶん気の永いことではあるが、絡み合った蔓を手繰って見ようと思う。

まだ、他にも多くの隠れた土地があるだろうが、私が今から言おうとする南北設楽郡にかけた東三河の一带は、つい最近まで、地狂言全盛地と言っても、あえて過当でなかったほどの事実が段々あったのである。

### < II >

狂言を演るもの自身の懸命さは言うまでもないが、それを見る見物の熱心さがま

た尋常でなかったのである。ずっと古く鎌倉時代から、東海道にかけての信仰の中心でもあった鳳来寺峰の薬師は、ちょうど設楽郡の中央所にあったが、この山の麓<sup>かどや</sup>の門谷の宿屋部落は、鳳来寺山の鎮守、熊野三社権現の祭典に伴う狂言で評判の土地であった。もう古い話で、ざっと七〇年前の安政二年（1855）であるが、一〇月の祭典狂言に、その頃東都で評判だった長柄長者鳥塚を八幕通しでやったものである。芸題が珍しいのと役者揃いが名を呼んで、近在へかけて煮えくり返るようであった。村の道者宿の松坂屋某が河内源太左衛門、島屋某が佐々木源吾、大武坊を鈴木駒吉という男が演って、いずれも名代の巧者揃いだけに、狭い門谷の地内は狂言見物の客で押し返される騒ぎをした。宿屋と言う宿屋は言うまでもなく、ただの家までが狂言見物の親類縁者の襲撃に面食らった。ある家などでは身寄りの者が二八人も泊まりこんだと言う。何分陰暦一〇月の半ばで夜も長い季節であったが、幕数が多いのと挿幕が加わったりして、昼の一二時頃から始まった狂言が、打ち出したときは夜が明け放れて、気がついてみるとあたり一面が真白い霜であったという。棧敷はもちろん土間は全部吹抜けで、見物は蒼空の下に座っている文字通りの芝居だったのである。そのおり鈴木駒吉の大武坊が殊によく演って、その憎々しい素振りには見物が我慢しきれず、警固の同心の制止も肯かばこそ、一時に舞台に押し寄せたという。ほんに息も詰まるような緊張であった。それでこそ寒い夜に星を戴いて座ってもいたのであろう。

おそらくわれわれには想像も能ぬほど伎芸に対する愛惜であった。長柄長者をやった翌の年が松前屋五郎兵衛で挿幕が小野道風、その次の年は姫小松俊寛物語と吃の又平、次が実録千代萩に菊畑、それから新薄雪物語に鶏娘であった。まるで江戸の歌舞伎年代記そのままのような記憶が、こんな片田舎に永いこと語り継がれていたのも、尋常事ではなかったのである。やれ松坂屋の俊寛は堪らなかったの、大黒屋の鶏娘はぞっとするほど綺麗だったのと、やるせなかった印象の数々を、思い出して繰り返していた人びとが、ついこの頃まで沢山にあったのである。

こうした地狂言の噂話は、門谷の狂言だけでも何程もあって、しかもそこだけの専売ではない。これから追々に言うつもりであるが、ただこうした一例からも想像される如く、一度地を替え、時を隔てて考えるとほとんど正気の沙汰とは思えぬほどの熱狂ぶりであった。これを簡単にその場限りの気紛れくらいにして、笑ってすましてしまう現象でない。しかしそれを考える前に、私としてはもう少し手近など

ころから、事実のままを見てゆこうと思うのである。

### <Ⅲ>

私のごく幼い頃から、炉辺がたりに祖母から聞いたことがある。お前の父も狂言好きで困ったものだったが、伯父はまた格別に好きだったと。何でもまだ七つか八つの頃だったそうな、村の祭りの狂言に、来る日も来る日も、朝起きるが早いかやかましく急ぎ立てて、末の叔父を背負って稽古見物に飛んで行って、日がな一日昼飯に帰るのも忘れていたそう。それで日が暮れて暗くなってから、背中の叔父を泣かせては帰って来たという。今でもその話を思い出すたびに、ひときわ体の小さかった叔父が、乳に飢えた弟をあやしあやし、還って来る姿が目に見えるようである。後になって叔父からもそのことを聴いたものだが、なんでも毎日稽古場の縁側に立ち通して、しまいにはことごとくの役の台詞から身ぶりまで、すっかり呑み込んでしまったと言う。その時の狂言は、まだ村に狂言舞台のなかった文久二年（1862）で、稽古場は村の「入り」という屋敷を借り、舞台は田圃の中の小屋掛けで、芸題は盛衰記宇治川の先陣、私の父は梶原館の腰元千鳥をやったそうである。

稽古場の縁側で、狂言好きの幼い兄を手古摺らして、泣きじゃくっていた末の叔父も、成人して狂言に出たが、これがまたうまいものであったそうな。初の舞台に一の谷の熊谷をやったが、花道へ出ただけで見物衆がもう気狂いたまげのようになって褒め立てた。それで振り付けの師匠までが、こりゃとても叶わぬと、魂消てしまったものだという。

これも近頃亡くなった母の一つ話しであった。ある時、父がある改まった席へ招待されて、出掛けに寒い頃のこと、平素から肌につけていた胴着を、見えるところでもないからと、そのまま紋服の下へ重ねて行った。しかしその胴着なる物に曰くがあった。生活もあまり豊かでなかったところから、母の丹念で祖母の古い長襦袢の仕立て直しであった。父は初め席についたときは大いに慎重の態度であったが、だんだん酒が回るにつれて、果ては好い気持ちになり、何がな余興をと云った末に、平素狂言好きのところから思いついて、忠臣蔵判官切腹の場を演ることになった。父の判官殿は、まず肩衣の気持ちで着ている羽織を脱いだ。次に帯をくつろげて肌脱ぎになり、胸を拡げて短刀代わりの扇子を手を把って、由良之助はまだかまだかと台詞をやりながら、ひょいと気がつく、何だか赤い変なものをきいている。曰く

づきの胴着を丸出しにしているのだ。それと気がつく、さすがに酔ってはいてもハットしたが、いまさら止すわけにもならず、忽々腹を切って衣紋を直し、冷汗掻いて還って来てそのまま寝てしまったという。お陰で私までとんだ大恥掻いたと、よく母が述懐したものである。

狂言好き酒好きの父が、酔えば定まって狂言の真似であった。私たちの前では鹿爪らしい顔をしていながら、人前へ出て二四孝の八重垣姫の身ぶりをやったなどと聞いて、どうしてそんな気になるものかと、子供心に不思議に思いながらも、一方淋しい気持ちにしたものである。

#### <IV>

思いもかけずつい変な気持ちになって、狂言を演りたくなかったのは、何も私の父ばかりではなかった。村の氏神の祭りには、何かな身振りの一つも演らなければ、お祭りらしい気分になれなかった。早い例が村の道普請などと言えば、遊び半分の呑気仕事で、少しばかり鍬先でそこいらを突ついたと思うと、もう煙草憩みにする。春の日永を路傍に寝そべって、狂言の噂でも一人が始めたりすると、ついむらむらと踊ってみたくなったそう。ましてそっちこちの村で、狂言の稽古に掛かったなどの噂でも立とうものなら、じっとしていられなかったそう。それじゃ一つ寄合を開いてみるかなどと、有力者が口でも切ろうものなら、若い者が飛び立つほどに嬉しがって、もう片端から村を触れ歩いたという。

地狂言がその年の農作と密接な関係があったことは言うまでもなかった。年々の行事としてかならず演ると決まっていた土地でも、思いがけない天候の具合で、肝腎な稲の出花へおおかせ暴風が来たりすると、いやでも中止になるようなことがあった。秋の祭りには大いに踊るべく、踊るものも観るものも、ともども意気込んで、振付も雇い込み、稽古も始まった矢先でも、にわかには沙汰止みになった例は間々あった。これを狂言が暴風に吹き飛ばされたといつて、村のものには何よりの痛恨事だったのである。

せつかく張り込んでいた狂言が、思いがけない暴風に吹き飛ばされたのとは反対に、そもそもの最初から、演るまいやらずまいと決めていたのが、ひよんなことからいやでも演らねばならぬような場合もあった。一狂言するために、仕事はおくれる、金は思いのほか掛かるのを、春の祭りに演ってまた秋演るなどと、そう再々催

されては、第一村が立ち行かぬと、老人連がよりよりしめし合せて、お互いの口からは、狂言の狂の字も出さぬようにして、空呆けていても、いよいよ秋の季節になって、厄日も無事だった、思いのほか豊作だなどと言おうものなら、どこからともなく、やれ狂言が始まるげな、こんな年に狂言をやらんでは、氏神様の思召しに背くだろ、どこそこでは振付を頼んだ、やれ稽古に掛かったなどと噂が立つ。そうになると若いものはもちろん老人連ももうむずむずしてきた。二、三人よるとさわるとその話で持ち切りで、結果は演ろうやろまいかで、たちまち動かし難い動機を作ってしまった。

## <V>

若い者達は、演りたくて堪らぬ、一方老人連も演らせてやりたいは山々ながら、前後を冷静に考えて、まず今年は止したがよかろうと、再三申し出る若い衆、中老連の要求を、頭から斥けた最後の落ち着きどころは、若い者が一致団結して、最後の行動に出ることだった。たとえ女房子供のあるものでも、誰も彼も申し合わせて、東海道の御油赤坂の宿場女郎屋へ立て籠もってしまう。そうして毎日女を相手に呑めや歌えのやけくそ騒ぎをやっている。そうすると今までえらいことを言っていた老人連の腰が他愛なく折れて、大狼狽の果てに寄合協議をして、第一番に金策をして、それを懐に迎えに飛んで行った。そうして若いものを宥めすかして、たちまち狂言は始まったのである。こんなことなら初めから演った方が、どれほどましに知れぬなどと、後悔はするものの、さて実際にはそうも行かなかったそう。たしか八名郡下川村〔現、東栄町〕の話だった。一〇月、畑の麦を播きかけてからひよんな破目になって、麦播きを放ったらかして村中が狂言に夢中になった。そのときできたという落首がある。

十月の中の十日の狂言で

幕は四幕だが麦はいつまく

村一統の中ならば、結局若いものには勝てぬ、大切な麦播きを放ってもやれやれですんで行ったが、時世がだんだん改まって、警察が何彼と村のことにやかましく口を出すようになっては、村中の相談はいかにまとまっても、そう簡単にはいなくなかった。いっさい狂言事は罷りならぬと、厳しい達しの前には、御油赤坂の女郎屋の二階ももはや意味はなかった。そう言ってもさっぱり諦めるかというに、それはお互いの胸の中が承知できなかった。衣装をつけてはならぬ。鬘をかぶっては規

則違反と言う個条書きの蔭へ回って、考え出したのが、昔あった狂言を再び引っ張り出したような、手拭いかぶり內衣装うちいしょうと言う変なものである。手拭いかぶりは文字通りの鬘の代わりに手拭いを畳んで頭に載せるので、內衣装というのは、各自の家にある持合せの衣類で間に合わせることであった。

手拭いかぶり內衣装というものを演ったのは、明治一七、八年頃であった。しかしかに手拭いかぶりでも、だんだん巧者になればほんとうの狂言に近かった。それでせつかく巧者に演ったばかりに、とんだまちがいを起こしたこともある。八名郡山吉田〔現、鳳来町〕の話だったが、村の八幡社の祭典に、この方法で鎌倉三代記と今一つ何やら演ったが、村の戸長役の某が狂言通で小器用なところから、振袖や鎧の類を金銀の紙細工でみごとに拵えて、それで舞台へ立ったところが、実は頼りない紙細工でも夜目にはチラチラと美しく見えて、えらい評判をとった。そのため本物の衣装をつけたろうと警察の嫌疑が掛かって、戸長殿は役目を召し上げられた上に、二日間の拘留を食ったという。

私の生まれた村などでも、手拭いかぶり內衣装で、村の観音堂を舞台にして忠臣蔵を演ったそうだ。やはり私の父などが先達で、師直や判官の烏帽子大紋を紙細工で作ったがあまりみごとでなかったか、警察の方は何の支障もなかったが、他所村の衆がやっかみ半分から悪口を言ったそうだ、横山の奴は嬢の嫁入り衣装で狂言を演ったと。事実女房の晴着などもつけて出たのである。

## <VI>

手拭いかぶり內衣装で演ったのも、実はそれ以前に、こっそり演って警察官に踏み込まれたり、演ったろう踊ったろうの嫌疑を受けたり、苦い経験の末であった。実は内緒で演って、口を拭いて知らん顔をしていた村はいくらかあった。南設楽郡の八束穂〔現、新城市〕という土地では、祭りの当夜、人家のある所から五、六丁も入り込んだ禿山の窪に、かねて仕度をしておいて、日暮れを待ってこっそり始めたが、それでも舞台には赤々と明かりをつけ、見物も次々に集まって来たという。芸題は忠臣蔵に阿漕ヶ浦であったそうだが、見物の衆は箆一枚ない野天の吹晒しに立ちつくしたまま、木の葉の動くにも警察の手ではないかと、まことに阿漕ヶ浦に綱引く思いで見っていたという。おいおい場数が進んで、役者見物も、ようよう落ちついて実の入りかけたとき、にわかに吹き起こった山風に、舞台の灯りは一つ残ら

ず吹き消されて、鼻を摘まれるような真暗闇の中に、大きな声一つ立てることもならず、か細い声で誰言うともなく、早く油を注げよ、油を注げよと呼んでいたとは、痛ましいやらおかしくもある嘘のような事実であった。

これも八名郡八名村〔現、鳳来町〕のある部落での話である。祭礼に警察をごまかして、こっそり準備して、初め駐在の巡査が巡回して来たときは、みな何食わぬ顔をしていて、さて巡査が帰ると同時に、用意の衣装を取り出して狂言に掛かったところ、かねて怪しいと睨んでいた警察では、にわか手配して舞台を取り囲んだ。見物は呆気にとられる、役者連中もびっくりして、われがちに後の山へ向けて遁げ出したが、きなれぬ振袖や脇差が邪魔になって、片っ端から捕まってしまった。それで妙な恰好の連中が、そろそろと富岡の警察に引っ張られて行った。一方村方では不意の出来事からせつかくの狂言を警察にとられて祭りも滅茶滅茶になってしまったが、それよりも役者連中を警察から取り戻すことが急場の問題であった。それですぐ村のおも立ったものが嘆願に行ったが、警察では頑として承知しない、すったもんだ果ては、警察の処置を恨んで、他の村方へも応援を頼み、よりより協議した末に、以後警察関係へは一切宿舎を借さぬことを申し合わせて、まず手始めに、各駐在所を追い立てにかかった。当時はまだ駐在所は村の民家を借りているのが多かったのである。この決議には警察側も閉口して、仲裁者のはいったまま無事解決はしたが、一時はえらい騒ぎであったという。

內衣装、手拭いかぶりでは面白くなし、またそれをうまくやれば、警察から睨まれる。そう言って山の窪や高山の峯で、御法度の博打でもするように、はらはらし見たり演ったのではなおのことつまらない。何がなうまい方法はと、煎じ詰めた末に思いついたのが、若い衆がそれぞれ俳優の鑑札を受けて演ることであった。これなら誰に気がねもいらぬ大威張りで、その方法でどこもかしこもみなやった。しかし、じつはそれも束の間であった。